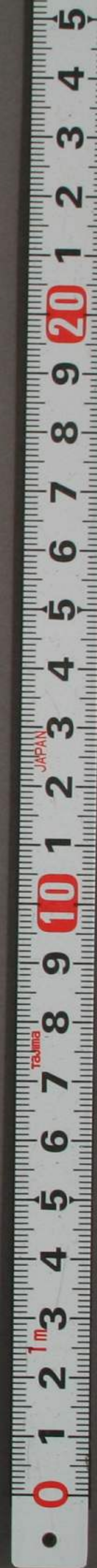


若山牧水歌稿 八首

特別
~4
7720





三十一首

甘衣山牧水

向つ峯に今日もしとじと所云い立ち照りかか
やくに獨り居にけり

輝けば山もかかやきぬも照り一夏と真白雲わ

びしかりけり

桂屋をの路のひとすぢしりじと見えあかつ
山を一帯もあまやまず

詮なしや書の底木の
下くぐり釣りにいでゆ
くわが心かど

燕啼くま書大野の日の
暮下つり竿かたげ行
けば遠きかな

浮雲にとりどり影の
うまれつつま書の空
は傾かむとす

崖の土ほろろ散る日
の秋晴に珠紅葉の
さびし~~く~~も燃ゆ

消えみ消えずみける
けさ空にうす雲のうち
もたなびき朝野令する

文房堂製

今朝は

秋の風吹くほど
閑あけてまだ覺あぬ人
をかへりみるかな

わかこころあるにあら
れず大風のしどろの
朝をあげてとありあり

風を強み軒の青みの
いとやしくその根の
土はゆれてやまなく

再びはかく晴るる日
もあるまじと惜しや
つつ日ごと野にあら

大野辺の秋の日ざし
をやや風み穿れし木
かげは白樫にして

秋と云ふ水かき声におどろきて
 心づきに
 とほき市街見ゆるあま
 かなしきは日か光なり
 秋の樹にしとどに
 葉散りしきりつ
 秋の森に蝶こそ一羽まひあ
 びたれやがて青
 葉にとまりし動かず
 玉に似て心ふとしも静まりぬ
 路傍のかち葉
 踏むに耐へあや
 すおかけり落葉ひろふと
 いかかめは地の
 匂ひこそまなこ痛めり

